

山桜の里 戸赤

水稻作付面積の変遷

「おなぶり」だ。

※おなぶり「早苗響」田植えを終えた祝い(広辞苑)

稲作付面積:単位ha

	国	町	戸赤			戸赤
1969(S44)	317万	?	?	国の作付ピーク	2012(H24)	7.4
1975(S50)	272万	640	?		2013(H25)	7.8
1985(S60)	232万	649	?		2014(H26)	7.7
1995(H7)	211万	570	?			
2005(H17)	170万	506	?			
2014(H26)	147万	486	7.7			

(出典:農林業センサス・町事務報告書ほか)



被災地の声

自然生かし地域づくり

波部 利男さん 65
下郷町



下郷町にあって、人口が少なくなる中、山桜や南無花と豊かな自然を生かした地域づくりを志している。東日本大震災以降、被災地復興支援や、自然生かし地域づくり、防災意識の向上、地域活性化を願う。活動する波部さん。

大震災以降、被災地復興支援や、自然生かし地域づくり、防災意識の向上、地域活性化を願う。活動する波部さん。

2015/05/18 06:34

川が変わる

れきしのひとコマ



5.10 付福島民報

【木地の学習No.55】幕末期の高野組の木地小屋は、針生の他に高野、黒沢、葉沢等もあつたはずであるから、次の金額は、それらの小屋数を合わせた売上金ということになる。文久二年・三八四両、元治元年・四八〇両であり、当時の木地の相場を示す確認ができないので、たしかなことは言えないが、一五〇〇両から二〇〇〇両くらいにあたる金額ではないだろうか。明治以降の田島町分についてみると、明治八年・藤生村八十両・六〇円、糸沢村六〇両・四五円。荒海村旧役場文書の三年間の統計をみると、明治二八年・七五二両・一三〇〇円、明治三〇年・七五二両・一四〇〇円、明治三十一年・七五二両・一四〇〇円となっている。当時荒海村の木地小屋は藤生、糸沢、滝原、新駅(萩野)等であつた。松沢むらについては、明治十年・一二〇〇〇人前・三九六円、明治十三年・五〇〇両、大正三年・三六〇〇両となっている。大正三年ごろは、南会津では、旧来型の二人挽轆轤が七割を占め、機械挽(鈴木式轆轤)は三割に過ぎなかった。針生の平野又平氏経営による山田木地工場の大正十一年の生産高は職人が六名ほどで一〇三七両である。また大正十五年の星佐治右工門の挽高は二六三両で、これだけの生産高を上げるには、水車動力による鈴木式轆轤を導入したことを物語っている。「明治四十二年、産業調査書」は鈴木式ろくろについて、「一ヶ月二一台二テ廿五両ヲ製造スレヲ得」と述べている。「(会津地方歴史民俗資料館「木地語り」より) (つづく)」

